戯曲

# 千利休と秀吉

芳賀檀

村松書館

著者略歴　芳賀檀（はが・まゆみ）
明治37年6月東京生まれ。昭和3年，東京帝国大学文学部卒業。その後ドイツに渡り，ベルリン大学のE・シュプランガー，フライブルク大学のM・ハイデッガー，ケルン大学のE・ベルトラムに師事し，文学，哲学を研究。H・ヘッセと交友。法政大学教授，第三高等学校教授，ベルリン大学講師，関西学院大学教授，創大教授を務める。文学博士。
著書に「戯曲集・レオナルド・ダ・ヴィンチ」「詩集・背徳者の花束」他。リルケ，ヘッセ，ニーチェ等の論及び翻訳多数。
住所—東京都文京区大塚6-12-1（941）2126

戯曲　千利休と秀吉　　定価一六〇〇円
一九八四年十月三十日初版発行
著　者　芳賀　檀
発行者　村松俊彦
発行所　村松書館
東京都葛飾区金町三ノ四一ノ一　〒125
電話（六〇〇）五八四四、（六〇七）二八五一
整版道野整版所　印刷竹内活版　製本松栄堂
製版新興社　写植東京光画
©1984 Mayumi Haga

戯曲

# 千利休と秀吉

芳賀檀著

村松書館

# 目次

千利休と秀吉　5
第一幕　6
第二幕　30
千利休との対話　83
あとがき　123

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 千利休と秀吉

## 第一幕　第一場（Allegro con brio）

（京都修学院奥の山裾の断崖。断崖の上に千利休の粗末な萱葺きの数奇屋。それにつづいて三畳台目程の茶室。対岸の断崖とは危なっかしい吊橋が通じている。天正十七年二月。所々に残雪があり、断崖の下から遠く滝の音がひびいて来る。

千利休、茶室で炉にあたり乍ら、読書に耽っている。壁床には古渓の書。柱には「蹲（うずくまる）」の掛花生。

千利休の弟子、本覚坊。炭火を入れた鉢をもって登場）

**本覚坊**　御師匠様。

**利休**　はい。これは本覚坊か。

**本覚坊**　今日は妙に悪冷えのいたします日で。

**利休**　春と言っても未だ二月だからな。

**本覚坊**　お寒いと存じまして、炉に炭火を少し持って参りました。

**利休**　おお、それは忝い。これは見事な楢の木の炭ではないか！　楢の木の炭は形も崩れず火力も強くて一番だな。

**本覚坊**　はい。昨年の秋、山で薪を焼いて少しばかり炭を作っておきました。それに聚楽第から少しばかり名香「東大寺」を貰って参りましたので、お慰さみの折、お使い下さいますよう。

**利休**　何「東大寺」を！　それは天下の名香ではないか。この山小屋では勿体ない。折角だから大切に蔵っておいて、大事なお客でもあった場合に使わせていただこう。

**本覚坊**　それにさっき山に行きましたので、雪を掘りおこして、未だ小さな蕨の芽、蕗の薹、芹などを採り、谷川に降りて山女、鮎などを少々釣っておきました。

**利休**　それは、それは。今晩は大変なお振舞いになるではないか？（笑い）

（崖の向う岸から、おうい、おうい、と呼ぶ声がする）

**本覚坊**　はて。今頃どなたでございましょう？　この山奥に。誰か訪ねて参ったのか、見て参りましょう。

（断崖の向う岸には太閤秀吉が、石田三成他二、三十騎の側近の武士と共に立って、今しも危い吊橋を渡ろうとしている）

（石田三成、本覚坊に向って）

**三成**　ここにおわせられるのは関白太政大臣太閤秀吉公にあらせられる。はるばる大坂から千宗易宗匠を訪ねて来られたのだ。もし千宗匠がそこに居るなら、茶室を出て太閤殿下をお出迎え申せと伝えよ。かく申すは軍奉行石田三成である。

**本覚坊**　えっ！　太閤様が！　早速千師匠に伝えまする故、暫らく御待ちを！

（本覚坊、千利休の茶室にかけ込んでくる。秀吉、その間に吊橋を渡ろうとする）

**本覚坊**　師匠！　大変でございます。太閤様が訪ねてお見えになりました。今あの危ない吊橋を渡ってこちらにおいでになります。早く御出迎えを！

**利休**　何？　太閤様が？（千利休あわててとび出し、雪の吊橋のたもとに、本覚坊と共に平伏する）

**秀吉**　随分危ない吊橋であるの？　千利休め、とんだ所にかくれておる！　渡って大丈夫かな？（石田三成手をとって、秀吉を導き乍ら）

**三成**　どうやら渡れそうでございます。どうぞお静かにお渡りを？

（二人吊橋を渡り、茶室の前に立つ）

**利休**　これは、太閤殿下！　千宗易にございまする。久しく御目にかかりませぬに。おなつかしうございまする。

**秀吉**　おお、千宗匠か！　そちも無事で何よりじゃ。随分危い所に住んでおるの。おかげでひどい目に会ったわ。

**利休**　殿下には何とて今日この様な深い山奥においで遊ばしたのでございますか？

**秀吉**　それはこちらで訊ぬべき事。そちは何で私が与えた聚楽第を捨ててこの様な山奥の乞食小屋に住んでおるのだ。随分とそちを探したのだぞ。

**利休**　申し訳もございませぬ。――したがまずお寒いこと故、取りあえず茶室へお通り下さいませ。むさ苦しい所ではございますが。御案内申しあげます。

（秀吉、石田三成、千利休について茶室に入る）

**秀吉**　おお、やっと火にありついたか！　生き返った様な思いがするぞ。（秀吉、しばらく火に温まり乍ら）千宗匠！　改めてそちにきくが、何で私が与えた聚楽第を脱れて、こんな山奥の掘立小屋にかくれておるのだ。あれ程固く約束したに、何でわしの九州遠征からの帰りを待っていては呉れなかったのだ。茶頭ともあろうそちが、わしにことわりもなく聚楽第を脱れるとは不届き至極。（少し強面に）本来ならばそれだけでも重き断罪に処すべきところ――

**利休**　（平伏して）何ともお詫びの申しあげようもございませぬ。この上はいかなる御断罪を賜わりましょうと、覚悟いたしてございまする。お辞りもなく聚楽第を脱れ出ました罪、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

万死に値すると存じまする。実は門弟山上宗二の死につきまして、私も御勘気を蒙りましたものと心得、それ故聚楽第を脱れ、この山奥に謹慎いたしておりました。

**秀吉**　又それを申すか。わしはもう少しも山上宗二のことなどにこだわってはおらぬぞ。それにおぬしに謹慎を申しつけたおぼえもない。まあよいわ。は、は、は、……勘気故謹慎いたしておったとは、おぬしのいつわりであろう。かくさず申せ。聚楽第がおぬしには気に入らなかったのだな？

**利休**　はい。信実、謹慎いたしておりました。それに、正直に申しあげますと、私の茶の湯の考え方が変ってきた故もございまする。

**秀吉**　もう戦争の時代は終ったのだ。戦時の茶の湯の考え方が変ってきても一向にふしぎではなかろう。千宗匠、お主の茶がどう変ってきたか、教えてほしいものだ。

**利休**　はい。恥を申しあげまするとと、聚楽第の御茶室は、私ごとき一介の茶坊主にとりまして、余りにも豪華絢爛であり、私はその豪奢故に堪えきえられなかったのでございます。

**秀吉**　それ故聚楽第を捨てて、この山小屋を撰んだと申すのか。千宗匠ともあろう者が、さてして気の小さい事を申すよな。は、は、は、まあよい。今日の所は許してつかわす。したが、折角宗匠の茶室を探し当てたのだ。何はともあれ一こん御点前にあずかりたい。実はの。九州遠征で五年間も大友やエスパニアの軍団相手に戦っておれば、気が荒んで参っ

ての。ひたすら京のお主の茶を思い出し、お主の茶が恋いしうてならなんだ。死ぬ程お主の点前に恋いこがれておったのだ。それ故戦いが済んだとたんに京へ、お主の許へとんで帰ってきたのだ。昼夜馬をとばせて、京へ帰ってみれば、そちは聚楽第を脱け出て、行方もわからぬと言う。その時の私の落胆はいかばかりであったか。ひたすらお主の点前に恋い焦れておっただけに、私の悲しみ、私の憤りはいかばかりであったか！　八方手をつくしてお主の行方を探させ、ようやくこの京の山奥にかくれておることを見出せたのだが、それ迄のわしの苦しみと空虚な気持は慰さめようもなかった。それ程私はそなたの茶に焦れておったのだぞ。

**利休**　何とお詫びの申しあげようもございません。この上はいかなるお叱りも、いかなる償いをもさせていただく覚悟でございます。

**秀吉**　その事はもう申すな。さっぱりと忘れることにいたそう。それよりも早くお主の点前にあずかりたいものだ。

**利休**　かしこまってございまする。しかし聚楽第と違ってこの山小屋ではろくな茶碗も釜も道具も揃えてはおりませぬ。茶碗にいたしましても、ここにはただ今焼の赤茶碗しか持ってきてはおりませぬ。

**秀吉**　今焼の赤茶碗か？　お前が所有のあの「早船」と言う？　それはなつかしいではない

か。いや、茶道具などは今はどうでもよい。ただお主の点前を味わいたいのだ。

**利休**　それでは甚だ行き届きませぬ点前で、心許のうございますが、お許しを。（茶を点じ、秀吉に捧げる）

**秀吉**　（千利休のたてた「早船」の茶を深く味わい、瞑目して、しみじみと）うむ。流石は千宗易。相変らずそちの点前は見事であるの。大きく、なごやかで、自由で、ひっそりと静かである。小さく、いじけた所は少しもないの。緩急自在。流れる様な自在な点前。俗界の騒がしい心もしずまったぞ。茶碗が又よいふぜいじゃ。大振りですがすがしく、口造りは抱え、高台は低い。何とも面白い風景を作り出しておる。ゆたかで、華やかで、それでいて、あたりを払うしんとしたきびしいものを有っておる。流石は天下一の大宗匠じゃ。

**利休**　身に余る御言葉。恐れ入りまする。（拝伏する）

**秀吉**　千宗易。それにしてもそちは昔と少しも変ってはおらぬの。未だ若々しいではないか。

**利休**　いえ。おつき合いをさせていただきましてから、はや二十年の月日がたちました。

**秀吉**　そうなるかの？　早いものであるの。月日の速さはまるで夢幻の様だ。が、お互いにこの二十年の月日をよく堪えてきたものだな……

**利休**　はい。それも茶の湯の故かも知れませぬ。茶は人を若くすると申しまする故。

**秀吉**　お前の茶は兎角抜群である。茶人として何人も有っていないものを持っておる。人間

としての型も並み外れて大きい。そして茶に全生命を賭けている所がある。茶道として前人未踏、独自の道を啓いた。お前に及ぶ者は誰もいなかった。お前は茶をして、茶以上のものを作り出した。それだけにお主の茶には美と慰さめの他にきびしく烈しいものがあるの。茶はお主の天成でもあろうか。

**利休**　恐れ入ります。決して私の茶はその様な大それたものではございませぬ。それに時代は変りました。一つの時代は終りました。その一方の端を担っていた私の茶も変らないではおりませぬ。私に代って別の新しい時代が来るでございましょう。

**秀吉**　そうかも知れぬ。茶の湯はどう変ってゆくのだ。そうだ。（機嫌よく）今更改めてきくのもおかしいが、お主の侘茶、天下一の茶の湯であるが、お主の侘茶とは何であるか？茶の湯とはそもそも何を言うのか？　数奇の極意とは何か？　ことごとしく言わぬでもよい。ただ一言で、かいつまんで、これが茶の湯であると言う所を教えてほしい。

**利休**　さて。――上様ともあろう御方が、何を今更おたわむれに。上様のような茶の湯の極限を極められた天下の大茶人に向って、茶の湯とは何かを御披露申し上げますのは、仏に向って「仏とは何か」を申し上げますと同様、難問中の難問にございまする。何を申しあげても、たださかしらぶった笑い物よ、とはばかられまする。それに茶とは教えさとすものではなく、自ら考え、自ら体で会得いたすものと……

**秀吉**　まあ、そう遠慮いたすな。お主と私との仲、一亭一客の間柄ではないか！　日頃ただ心安うつき合うて、深く考えても見なんだが、時には茶の湯の師匠としてのお主から、真向に叱られて見たいわ。

**利休**　何を仰せられます。勿体なき御言葉。と言うと折角のお訊ねに何も御答えいたさぬも余りに風情がござりませぬ故、ただ一個の侘茶人として、率直な所をおなぐさみに申し上げさせていただきまする。

**秀吉**　うむ。そうしてくれい。わしを決して関白の、太閤のと思わず、ただの一茶人として門弟として、一喝を与えてほしいわ。

**利休**　一喝などとはとんでもない。ただ私の師匠紹鷗が申しておりまする。「元来茶の湯には奥義とか、秘伝とか言うものはない。ただ古き書物を多く見覚えて、作分を出し、茶の湯をする覚悟が則ち師匠なり」と。

**秀吉**　うむ。

**利休**　又「一物も持たず、胸の覚悟第一、作分一、手柄一、この三ヵ条の調いたるを侘数奇と言う」と申しております。「作分を出す」とは己れの独自の道を見出すと言うことで、己れを見出しえない人は茶人ではない、と言うことでございましょう。その上、一亭一客。亭主と客の心がぴったり合わねばならず、その間に無言の対決、取引がなければならぬと

存じまする。

**秀吉**　無言の取引がなければならぬとは？

**利休**　なごやかにきびしく、亭主も客も未来の運命を見透す。いかなる運命にも対抗し、最悪の事態をも静かに迎える覚悟に落ちつく事であろうと存じまする。

**秀吉**　うむ。なかなか難しい道であるの！

**利休**　何を仰せられます。上様なぞ天下万人の上に立ち、人の心も運命も見透しつくしておられる方ではござりませんか。

**秀吉**　まあ、天下政治の事は申すな。

**利休**　又茶として罷り通るか、異端であるかは存じませぬが、門人山上宗二も「茶の湯の者覚悟十体」の中に「三十より四十までは我が分別を出す。四十より五十までは師を西と東と違えてするなり。そのうち我流を出して茶を若くするなり」と申しております。

**秀吉**　又しても宗二の事を言うか。もう彼の事は言うな。――しかし彼のその言葉はなかなか面白い言葉だ。併し私がききたかったのは千宗易、お主の言葉である。お主は茶の極意を何と心得ておるのか？

**利休**　私の申す侘茶とは、その至極の本質を申せば、自然に対する愛、人に対する愛、に他なりませぬ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com